

私の幸福

赤間 悟

五十代半ばで体力の減退を知り印刷業から身を引くまで約三十年、過酷な労働の毎日であったが、かえって自分を見つめ過ぎることを避けることができ、必要以上に悩まないで来れたということが先ず私にはよかったようである。

仕事に集中している時は自分を忘れることができ、しかも生きているという充実感があつた。そして、仕事をしない時はなるべく読書をしてきた。赤座憲久著『目の見えぬ子ら』を読んで、本が読めることはどんなに幸せなことかを痛感していたし、いい文章はよく朗読し、妻に語り聞かせたりしていた。声を出していないと耳の聞こえない私は発声そのものができなくなるような気がしていたのである。

読書が私の支えとなることは早くから気づいていた。というより、私を支え心身を鍛えてくれるのは読書だけであり、いい文章を求めるようになって行つたのは必然的であり、六十代に入った今益々そのことが痛感される。

私は、聴力を失ってから耳鳴りに悩まされて来た。これはどうしても避けることができなかつたものであり、それとの闘いを余儀なくさせ

られた。その耳鳴りも昔歌つたメロデイに変わつたりすることがあり、そんな時私はひとときの慰めを持つた。そしてそれが様々な記憶をよみがえらせた。耳鳴りはまた無音の世界の恐怖を忘れさせてくれた。

少年時代の、豊穣で清澄な環境で、父母兄弟の慈愛に包まれ、全てを肯定的に捉え、人を信じ、謙虚であつたあの日々からこそ真に幸福な時間があつたことに気づいた。その輝かしかった時間を思い出し書くことで、自分は確かに満たされた。これは私の嬉しい老後をも予想させるものである。

幸福は求めて得られるものではないという人もおり、また、いまだき幸福論なんかという人もいるようであるが、私の場合「幸福すなわち生き甲斐」であつたので、ためらうことなくこれを追求して来た。私のそれは地味で、静かな充実感であり、持続するものであり、そして時々、腹の底からこみあげて来るような強い感動を味わう体のものであつた。

読書でも、初めから批判の目で見ないで、まず他者に謙虚に学ぶという姿勢で対するよう

にして来た。そのお蔭でどこにでも歓びの言葉が見出され、一行の詩がとても美しく響いて来ることが多かつた。

なによりも私は、よき妻に恵まれた。これは、「幸運」と呼ばれるべきで、なんと云つても有難いことであつた。私の愛読書『幸福論』の著者カール・ヒルティは、結婚ということを重視し、配偶者を選ぶのに慎重にしなければならぬと説いている。私はそれまで何人かの異性とつき合い、別れた。そして、今の妻に巡り合えた。その妻と私はただ堅実な日々を持ちたいと願つた。妻が料理、家事という平凡でしかも大切なつとめを毎日つづけてくれたからこそ、私は生業(なりわい)に集中することができ、心身が安定し、充実した時間を持つことができたのである。

一方で、沢山の友や協力者がいて私を支えてくれたことにも年とともに感謝の念を強くした。筆談の労を惜しまないで語りかけてくれた人のことも忘れないようにしていた。その無償の行為のお蔭で私の孤独な時間をかなり埋めることができたのである。仮令(たとひ)、月日

と共に人は変わることが事実だとしても、それでもなお、あの時つき合ってくれた人々は少年らしい純粋な心を持つていたのだという思いが今の私を慰めてくれる。

このように、日常的体験により私は十分に幸せになれることを実感しておりながら、時に私を懐疑、憂鬱に沈ませた。なぜなら、私だけがこんなに幸せであつてよいのか、というある後るめたさがあり、また、周囲に目を向ければ心を曇らす事態も多くなつていいることを認めなくてはならないからである。

日本人がこんなに随ちてしまうことを誰が予想し得たであろうか。誰でも一人では生きられない。運命を共にしなければならぬ同胞(はらから)の中で、どうして私だけが幸せでありえよう。「私の幸福」も大いなる危機にあると言わなければならぬ。

また、美しい自然と環境がいかにか私たちを支えていたことか、それらが失われて初めてそのことに気づいた時、私たちは愕然とする。

だが私は、希望を捨て切れない。少しでも世の中を良くしようとしていいる人々も存在していいることを信じた。そして、人生に真面目に取り組む真摯に生きようとする若者が一人でもいたら私はそこに救いを見出すことができる。

この人生をどのように受けとめるべきか。今まで試行錯誤をくりかえして来て、私の到達したところでは、真に幸福を追求しようと決意したのであれば先ず日々を謙虚な心で生きなければならぬ、そして童心を忘れず単純でなければならぬ、ということである。青春時代にのみ体験できた、美しいものに感動し、深い歓びを味わつたあの充実した日々を呼び戻せれば、この困難な日常に生きることの辛さに耐えさせ、なんらかの報いをもたらしてくれる筈である。このように、回想の歓びは常に私を支え、人生苦を快いものに変えるほどの生き甲斐感を与えてくれた。

幸福であるためには、寛容の心を持たなくてはならないと思う。日常、心身の安定した状態を保ちたいという一事を考えても、例えば、憎しみの感情を淘汰することが求められるだろう。私が赦されるためには、他人を赦さなくてはならないのである。森有正が『いかに生きるか』に書いていいるように、人を赦すということとは《神》を通してでなければならぬ、という所まで導かれざるを得ない。

亀井勝一郎は「歳月は慈悲を生ずる」と言つていた。

今私は、読書と思索、観照の日々を送りなが

ら、来し方を静かにふりかえり、書いている。ここで思うことは、ただ生きること、存在することに意味があるのではないか、ということである。これは、中学時代に読んだ内村鑑三の『後世への最大遺物』の中の「高尚に生きることが世に遺せる最大の価値」とした言葉によるものである。

(一九九七・夏)



イラスト©吉澤 恵